

IATSS三十周年によせて

研究テーマの持続的発展をめざして

詫間 晋平 川崎医療福祉大学大学院教授

1958年東京大学教育学部卒業。62年スタンフォード大学大学院博士課程修了。東京大学助手、大阪教育大学助教授、国立特殊教育総合研究所部長、東京学芸大学教授を経て、現在川崎医療福祉大学大学院教授。少子化問題と関連した児童のリスクマネジメントの研究等に従事。



「IATSS」のスピリットは、その母体である本田技研のそれを反映して、「先進創造」であり、「質・技・志」であろう。特に「志」の部分は注目されるが、あまり高い要求水準を掲げても、失敗に終わりトラウマを残すことが多い。

今後10年で交通事故死を半減させるという目標も、かなり高いハードルであり、大都市部の努力に負うところが現在のところ大きい。要因の一つである各種の法規制の効果も次第に薄れてきているのが現状である。そのうえ、事故件数や負傷者数等の増加には歯止めがかかっていない。

しかし、拱手傍観していてよいわけではなく、交通事故防止に向けて、「IATSS」としては、研究領域で少しでも、その防止に役立つ成果を上げてゆかなければならない。

そこで、IATSS事務局で用意された「研究調査活動の歩み」を一覧してみる時、当初から「数寄屋橋交差点の研究」(1975年)、「東日本における暴走族と青少年問題」(1975年)、「視覚情報システムからみた信号・標識等の検討」(1976年)、「地域文化特性と運転行動の研究」(1976年)など、現在でも注目すべき重要なテーマの研究は多くみられる。

問題はそれが散発的な発表に終わってしまい「持続的な発展」(Sustainable Development)につながっていない点にある。特定のグループに研究資源が集中することを避けるための配慮も必要であるが、一定の社会的な評価を得た研究、例えば『ヒヤリ地図づくり』提案の成果とその運用に関する研究」(2000年)などは、メンバーを部分的に組み替えても、相当期間継続し、全国的に、またはグローバルに情報発信を計画的、組織的に進める価値があるように思われる。

もちろん、研究のテーマの種別には「不易」なものと「流行」的なものが存在するのは当然であるが、それらの、より有効な組み合わせを今後一層検討していきたいものである。